授賞作品

ドキュメンタリー映画

ぼけますから、よろしくお願いします。

監督・撮影・語り／信友　直子

母、87歳、認知症。父、95歳、初めての家事。

広島県呉市。この街で生まれ育った「私」（監督・信友直子）は、ドキュメンタリー制作に携わるテレビディレクター。18歳で大学進学のために上京して以来、40年近く東京暮らしを続けている。結婚もせず仕事に没頭する一人娘を、両親は遠くから静かに見守っている。

そんな「私」に45歳の時、乳がんが見つかる。めそめそしてばかりの娘を、ユーモアたっぷりの愛情で支える母。母の助けで人生最大の危機を乗り越えた「私」は、父と母の記録を撮り始める。だが、ファインダーを通し、「私」は少しずつ母の変化に気づき始めた…

病気に直面し苦悩する母。95歳で初めてリンゴの皮をむく父。仕事を捨て実家に帰る決心がつかず揺れる「私」に父は言う。「（介護は）わしがやる。あんたはあんたの仕事をせい」。そして「私」は、両親の記録を撮ることが自分の使命だと思い始める。

娘である「私」の視点から、認知症の患者を抱えた家族の内側を丹念に描いたドキュメンタリー。2016年9月にフジテレビ／関西テレビ「Mr.サンデー」で2週にわたり特集され、大反響を呼んだ。その後、継続取材を行い、2017年10月にBSフジで放送されると、視聴者から再放送の希望が殺到。本作は、その番組をもとに、追加取材と再編集を行った完全版である。娘として手をさしのべつつも、制作者としてのまなざしを愛する両親にまっすぐに向けた意欲作。

1961年広島県呉市生まれ。1984年東京大学文学部卒業。1986年から映像制作に携わり、フジテレビ「NONFIX」や「ザ・ノンフィクション」で数多くのドキュメンタリー番組を手掛ける。「NONFIX　青山世多加」で放送文化基金賞奨励賞、「ザ・ノンフィクション　おっぱいと東京タワー～私の乳がん日記」でニューヨークフェスティバル銀賞・ギャラクシー賞奨励賞を受賞。他に、北朝鮮拉致問題・ひきこもり・若年認知症・ネットカフェ難民などの社会的なテーマから、アキバ系や草食男子などの生態という現代社会の一面を切り取ってきた。本作が劇場公開映画初監督作品。

プロデューサー:大島 新　濱 潤　共同プロデューサー:前田亜紀　堀 治樹　山口浩史
編集:目見田 健　実景撮影:南 幸男　音響効果:金田智子　ライン編集:池田 聡　整音:富永憲一
配給宣伝協力:ポレポレ東中野　ウッキー・プロダクション
製作・配給:ネツゲン　フジテレビ　関西テレビ
2018年／日本／カラー／102分
©2018「ぼけますから、よろしくお願いします。」製作・配給委員会

《授賞にあたって》

シグニス・ジャパン顧問司祭 **晴佐久昌英（カトリック司祭）**

撮ることが、愛

ドキュメンタリー映像の監督が自らの家族を撮るという作品は、珍しくない。家族という最も身近な対象を撮るのは、ある意味当然のことでもあるのだが、そこには大きなジレンマがある。その家族を一監督として客観的に撮るのか、一家族として主観的に撮るのかという問題だ。

どちらがいい悪いということではない。監督として撮るならば、時に冷酷ともいえる判断が必要であり、だからこそ見えてくる真実がある。家族として撮るならば、家族ならではの親密さが反映されて、だからこそ生まれてくる感動もある。どちらも意義深いのだが、撮る以上は、どちらかに徹する覚悟が必要になる。

ところがここに、そのどちらも兼ね備えた、奇跡の作品が現れた。87歳の認知症の母と、それをケアする95歳の父の二人暮らしを、ドキュメンタリー作家である一人娘が撮るというこの作品で、カメラを回しているのは間違いなく監督であり、そしてまごうかたなき一人娘なのである。画面からは、その両人の想いが二重奏のように響いてくる。

感情の高ぶった母親が娘に対して「もう撮らないで」というその姿を、娘は冷酷に、しかしあふれんばかりの愛情で撮り続けている。そのときカメラは、むき出しの現実の奥に秘められた尊い真実を撮っているのであり、ここではもはや、撮ることが、愛なのだ。だからこそ、見るものもまた、主観的な自分の家族観を、客観的なまなざしで見直すことができるのであり、そのまなざしをこそ、今の社会は必要としているのではないか。

観終えた今、観たものにとって、この三人はもはや他人ではない。共に観た人々とさえ、無縁ではなくなる。観るものを、これほどまでに「家族」にしていく映画があっただろうか。カトリック映画賞の目的にもかなう、尊い映画である。

●日本カトリック映画賞とは……

SIGNIS JAPAN（カトリックメディア協議会）は放送・映画・視聴覚メディア・インターネット等のメディアを使って、キリストのよい知らせ（福音）を広めたいと望んで、活動しているカトリックの司祭、修道者、信徒、求道者の団体です。

「日本カトリック映画賞」は、前々年の12月から前年の11月までに日本で公開された映像作品の中から、カトリックの世界観と価値観に最も適う作品にSIGNIS JAPANから贈られる賞で、今年で43回目を数えます。

SIGNIS JAPAN　http://signis-japan.org
SIGNIS ASIA　http://signisasia.org
SIGNIS WORLD　http://signis.net

1976年　土呂久
1977年　ねむの木の詩が聞こえる
1978年　春男の翔んだ空
1979年　マザー.テレサとその世界
1980年　父よ、母よ
1981年　教育は死なず
1983年　この子を残して
1984年　国東物語
1985年　銀河鉄道の夜
　　こんにちわ地球家族
1986年　海と毒薬
1987年　ゴンドラ
1988年　火垂るの墓
1989年　黒い雨
　　戦場の女たち
1990年　ベンポスタ子ども共和国
1991年　あーす
1992年　阿賀に生きる
1993年　スペインからの手紙
1994年　学校
1995年　地球交響曲第二番
1996年　絵の中のぼくの村
1997年　愛の黙示録
1998年　ユキエ
1999年　ナビィの恋
2000年　老親
　　−豪日に架ける− 愛の鉄道
2001年　GO
2002年　チョムスキー9.11
2003年　HIBAKUSHA—世界の終わりに
2004年　ライファーズ
2005年　村の写真集
2006年　博士の愛した数式
2007年　ひめゆり
2008年　おくりびと
2009年　風のかたち
2010年　月あかりの下で ある定時制高校の記録
2011年　エンディングノート
2012年　隣る人
2013年　先祖になる
2014年　谷川さん　詩をひとつ作ってください
2015年　あん
2016年　この世界の片隅に
2017年　ブランカとギター弾き

SIGNIS JAPAN（カトリックメディア協議会）事務局
〒107-0052 東京都港区赤坂8-12-42　女子パウロ会内
E-mail:info@signis-japan.org
担当:大沼　携帯090-8700-6860